緒方条里内遺跡

県道竹田・野津線改良工事に伴う発掘調査報告書

牛ノ田遺跡
寺縄手遺跡
大坪遺跡

1987

大分県教育委員会

緒方条里内遺跡

県道竹田・野津線改良工事に伴う発掘調査報告書

牛ノ田遺跡

寺縄手遺跡

大坪遺跡

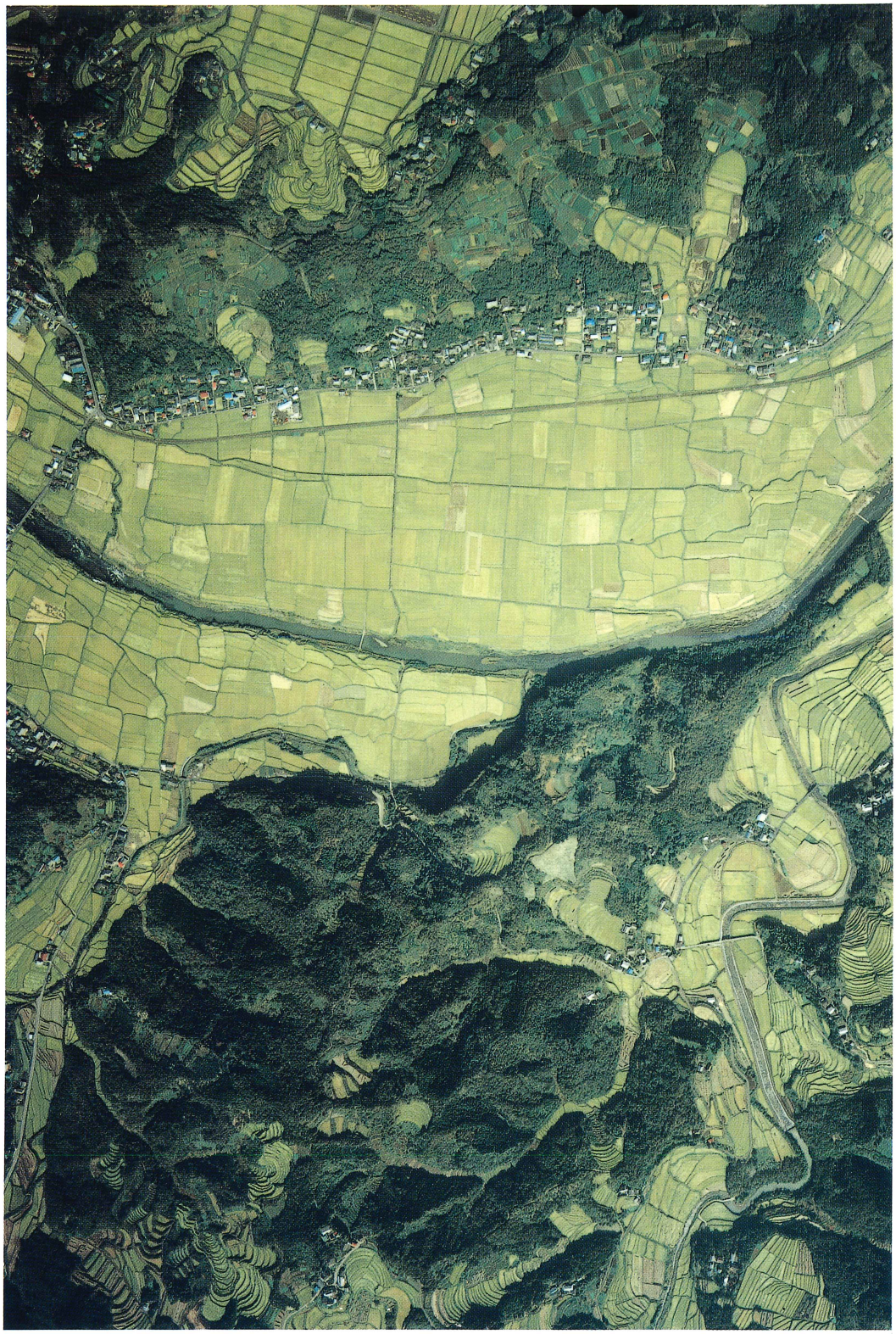
例　言

1. 本書は主要地方道竹田・野津線改良工事に伴う緒方条里内遺跡群の昭和61年度に実施した発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は大分県土木建築部の依頼により、大分県教育委員会が主体となって実施した。
3. 本書の執筆と編集は栗田勝弘が主として担当し、Ⅰ・Ⅱについては清水宗昭が執筆した。
4. 遺物の整理および図面の作成については調査員が分担したほか、姫野和子、田北節子、広滝敏子の協力をえた。
5. 発掘調査の実施にあたっては、緒方町教育委員会、緒方町立歴史民俗資料館、大分県土木建築部道路課、同三重土木事務所工務課、足立建設有限会社をはじめ、地元の方々の協力をいただいた。

記して謝意を表したい。

目　　次

Ⅰ　はじめに……(1)
Ⅱ　遺跡の立地と環境……(3)
Ⅲ　調査の概要と調査区の設定……(4)
Ⅳ　牛ノ田遺跡……(5)
　1　検出遺構……(5)
　　柱 穴 群……(5)
　　土 壙 墓……(5)
　2　検出遺物……(6)
　　土 器 類……(6)
　　石 器 類……(6)
Ⅴ　寺縄手遺跡……(8)
　1　検出遺構……(8)
　　溝状遺構……(8)
　　大型不定形土坑……(8)
　　石組土坑……(8)
　2　検出遺物……(11)
　　土 器 類……(11)
　　a. 表面採集遺物……(11)
　　b. 大型不定形土坑出土遺物……(11)
　　c. 石組土坑出土遺物……(11)
　　石 器 類……(12)
Ⅵ　大坪遺跡……(13)
　1　検出遺物……(13)
　　土 器 類……(13)
　　石 器 類……(13)
Ⅶ　まとめと考察……(17)
　1. 牛ノ田遺跡の土壙墓の年代と特徴……(17)
　2. 寺縄手遺跡出土土師器の位置付け……(19)
　3. 牛ノ田遺跡、寺縄手遺跡と緒方条里の上限……(20)
　4. 扁平打製石斧と石核について……(21)



空中写真（白丸西より牛ノ田遺跡・寺縄手遺跡・大坪遺跡）（国土地理院による）

Ⅰ．はじめに

大野川の中流域に位置する緒方盆地は、流域における最大の沖積地をもち、その東側部分では条里的水田区割をよく残した数少ない歴史的景観地域でもある。

この盆地を東流する支流の一つ緒方川の北岸に沿って、県道（竹田－野津線）のバイパス工事が施行されるようになり、昭和59年度に試掘調査を実施し、遺跡の範囲確認調査を行った。その結果、路線内の３ヵ所において遺構と遺物包含層を確認し、工事に先立って本格的発掘調査を行う必要のあることを関係機関で確認した。

今回の発掘調査は、遺跡として確認された３地区について記録保存を目的として実施したものであり、条里制遺構と直接結びつく資料の検出はできなかったが、緒方盆地の歴史的変遷を知るうえで、貴重な成果を得た。

なお発掘調査は、昭和61年10月27日に開始し、62年１月20日に完了した。

調査団の構成

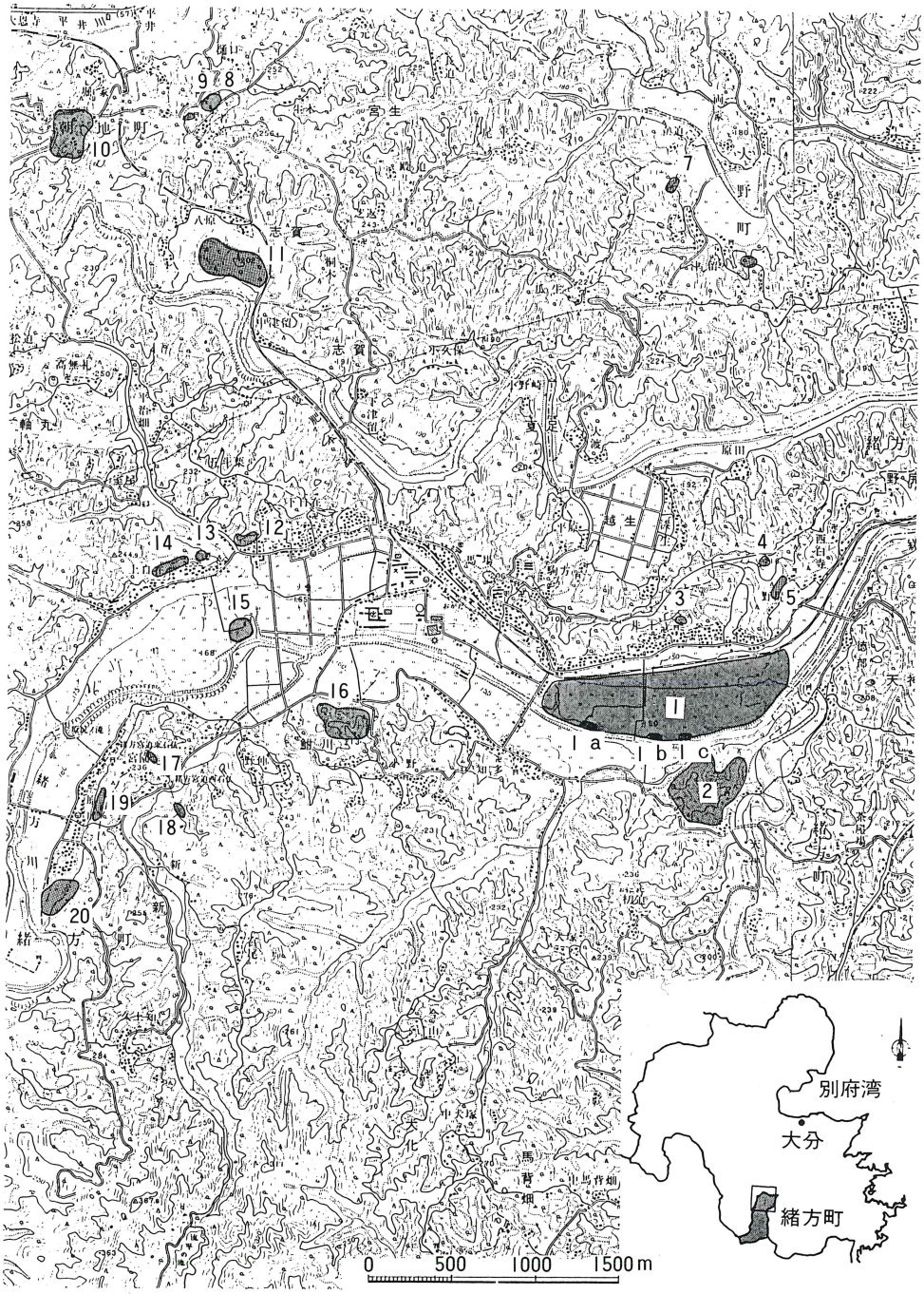
事業主体　大分県土木建築部

調査主体　大分県教育委員会

調査委員　賀川光夫（大分県文化財保護審議会委員・別府大学教授）
小田富士雄（同・北九州市立考古博物館長）
塔鼻勝人（大分県教育庁管理部文化課長）

調 査 員　後藤宗俊（大分県教育庁文化課文化財専門員兼埋蔵文化財係長）
清水宗昭（同　主査）
栗田勝弘（同　主任）
西　哲弘（同　〃）
綿貫俊一（同　嘱託）

調査協力者　合沢トミヨ　合沢　テツ　合沢カズエ　安藤フミヨ
小山美代子　加藤　英和　原田　信子　米田　和子
秦　町子　後藤　光子　衛藤　信子　麻生　雄士



第１図　緒方町とその周辺の主要遺跡位置図（国土地理院による）

1	緒方条里遺跡(中世)	4	城山古墳(古)	10	高城城跡(中世)	16	徳丸城跡(中世)
1 a	牛ノ田遺跡(縄・中世)	5	城山横穴古墳群(古)	11	志賀城跡(中世)	17	宮園横穴古墳群(古)
1 b	寺縄手遺跡(縄・古代)	6	津留横穴古墳群(古)	12	小宛横穴古墳群(古)	18	徳丸城跡横穴古墳群(古)
1 c	大坪遺跡(縄)	7	折立横穴古墳群(古)	13	馬背畑地下式横穴(中世？)	19	米納田横穴古墳群(古)
2	天神館跡(中世)	8	竜泉寺古墳(古)	14	小無類横穴古墳群(古)	20	浄土遺跡(縄・弥)
3	大久保古墳(古)	9	小原遺跡(縄)	15	緒方惟栄館跡(中世)		

Ⅱ．遺跡の立地と環境

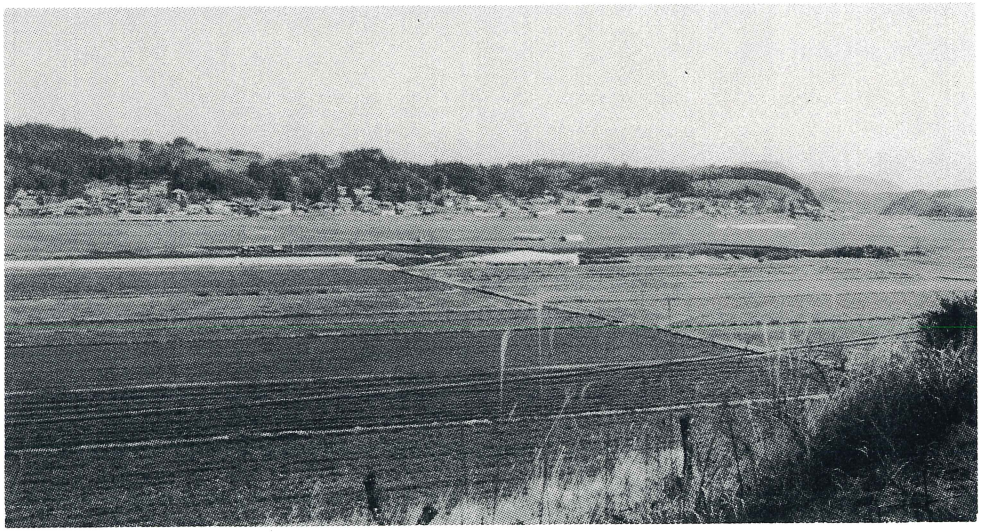
緒方条里遺跡が所在する緒方盆地は、県南部を斜断する大野川と支流緒方川との合流点近くの西方に発達した、流域最大の河谷盆地である。盆地の基盤は阿蘇溶結凝灰岩でありその上部に洪積層、沖積層の堆積がみられ、その大部分は水田として利用されている。盆地は東西約４km、南北の幅0.5～１kmのゆるいＳ字形を呈する。その中央を緒方川が東流し、大野町との境の沈堕ノ滝付近で大野川本流と合流する。

緒方条里遺構は、盆地の東部、緒方川の北側部分の東西1.5kmの範囲の約50haの水田部分である。かつては、盆地の大部分において条里的区割が遺存していたものと推定されるが、河川の侵食等によるものか大半は失われている。わずかに、緒方駅東側の町道の方向にその痕跡をうかがい知ることができる。

盆地の周囲を展望すれば、南部は緒方川の源流地帯となる祖母・傾山系が連なり、その山麓には火山性の台地が点在する。縄文時代の原始農耕が提唱される依処となった晩期の大石遺跡や木野遺跡・小高野遺跡（竹田市）は、これらの台地上に占地するものである。同様に北部は御座ヶ岳山塊の南麓一帯に中流域最大の大野原台地が発達しており、旧石器時代から古墳時代に至るまでの豊富な遺跡群が知られている。

歴史時代の遺跡としては、条里内遺跡群の西方約２kmの緒方川北岸に豊後の雄、緒方惟栄の居館跡がある。ここより北方約2.3km地点の大野川本流に接する独立した丘陵が志賀氏の志賀城跡、西方５kmの急崖上には著名な岡城跡が位置している。また鎌倉時代の造立とされる宮迫磨崖石仏群は、惟栄居館跡の南西１kmほどの丘陵部にある。

条里内遺跡群は、こうした豊かな自然と歴史的環境の中にあり、緒方盆地の歴史的変遷の一端を知るうえで重要である。



緒方条里遺跡遠景（南側より）

Ⅲ．調査の概要と調査区の設定

本年度の調査は緒方盆地を東西に貫く「主要地方道竹田・野津線」の施工に伴う発掘調査である。調査対象地は東流する緒方川左岸に沿う道路敷であり、緒方条里遺跡として周知された南端に位置している。

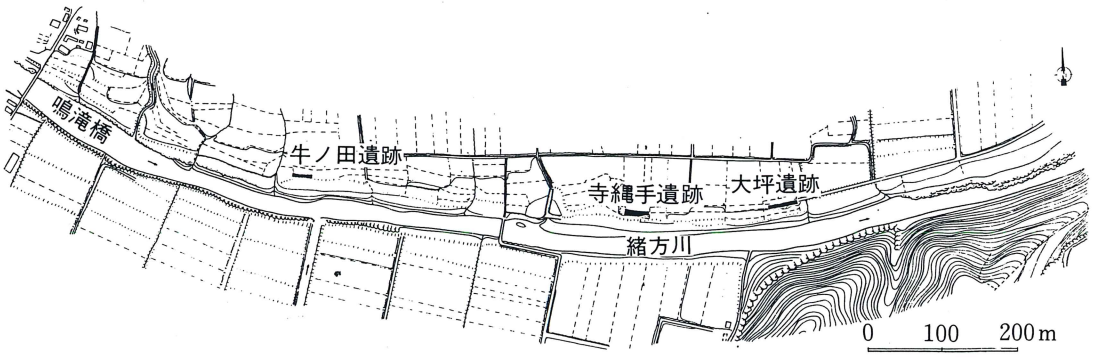
昭和59年度には、当路線内における埋蔵文化財の悉皆調査が実施されており、試掘調査の結果、緒方町大字井上において３ヵ所の遺構・遺物集中域を把握している。これ等は西側より小字名を冠して、牛ノ田遺跡、寺縄手遺跡、大坪遺跡と呼称している。当該地は緒方川の左岸に位置し、現川床面より僅か３ｍ前後の比高を持つ河岸段丘である。河川に沿う一帯は増水時の氾濫に起因するものか、狭少な面積からなる緩い棚田状の水田面が展開している。従って、調査対象地の北側に遺存する条里的遺構の残影は、当調査区一帯では面影すらない。

今回本調査を実施した牛ノ田遺跡は遺構・遺物包含層が残存する約160ｍ²の範囲である。表土下約60～80㎝の漆黒色土層中には多数の柱穴群が遺存し、調査区の東端には、中世期の土壙墓が一基検出されている。牛ノ田遺跡で出土した遺物は縄文時代と中世の遺物であるが量は僅少である。

一方、牛ノ田遺跡より400ｍ下流には寺縄手遺跡が所在する。発掘対象面積は約300ｍ²である。検出遺構としては断面Ｕ字状を呈する溝状遺構や不定形土坑、石組土坑等である。検出遺物は後者２遺構に伴出する土師器、須恵器類であり、数片の縄文時代の遺物が表面採集されている。

また、寺縄手遺跡より約200ｍの下流には大坪遺跡が確認されている。発掘対象面積は約250ｍ²である。遺構は皆無であるが、縄文後期～晩期の土器、石器類が少量出土している。中でも扁平打製石斧の石核は極めて稀有な発見であり、遺跡の性格を検証するうえで看過し難い。

以上の様に３遺跡の遺構・遺物は僅少であったが立地的には調査対象区の北側域に遺跡の主体部が展開するものと推察されており、条里遺構の現状保存とともに今後遺跡の取り扱いを十分留意する必要があろう。



第２図　調査区配置図

Ⅳ　牛ノ田遺跡

牛ノ田遺跡は緒方川床との比高差が僅か３ｍ弱であり、河川敷より３枚目の現水田端に所在する。表土下約60～80cmの間には２～３枚のマンガン沈着面があり、水田面の重複を示唆している。遺構や遺物の検出面は旧水田面の下層である漆黒色土層内である。本土層に掘り込まれた遺構は夥しい柱穴群と１基の土壙墓である。また出土遺物としては数片の縄文土器片と扁平打製石斧、中世の磁器類である。

1. 検出遺構

柱穴群（第３図）

牛ノ田遺跡の漆黒色土層中に掘り込まれた柱穴群は径約10～20cm程度の掘立柱の跡である。数棟の家屋が重複した様相が顕著であるが図上での判断は困難に近い。これ等の覆土は灰や炭化物が混入した灰褐色を呈するものであり、全てに共通した色調を呈していた。従って柱穴の配置を弁別し、建物を推測することは不可能であった。しかし、調査区の南側と北側には東西に、７本の柱穴が約２ｍ間隔で並んでおり、柵列状の遺構が想定し得た。

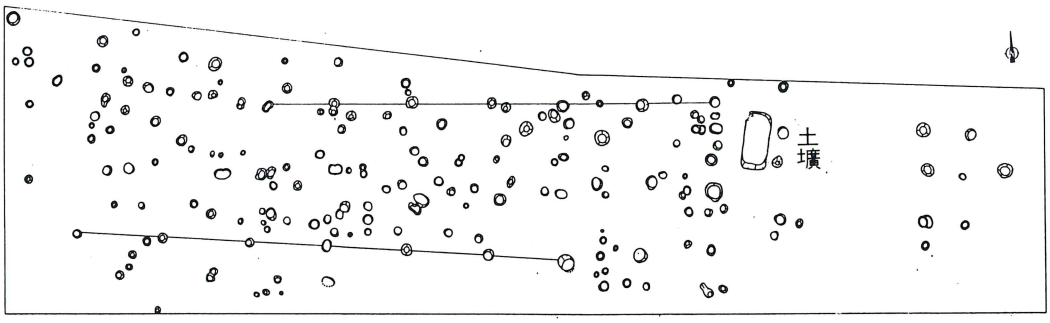
土壙墓（第４図）

牛ノ田遺跡の東端近くに一基の土壙墓が検出されている。土壙墓は長軸をほぼ南・北側にとり、平面形は寸づまりの長方形を呈する。長径は外法で約143cm、内法で約130cm、短径約68cm、深さ約38cmを測る。短軸の断面は下部で脹らむ袋状を成す。覆土は灰や炭化物が混在する黒色土層であり、底部には形態を留めない黄褐色の骨片が少量検出されている。骨片は腐敗した木質状を呈するが、細かく観察すると、歯の一部や頭蓋骨の残片が土壙の北部中央に遺存していた。歯や頭蓋の大きさから成人骨と推定された。

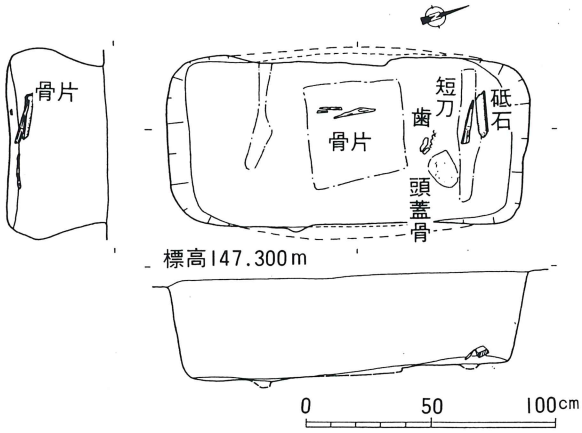
また、土壙の床面中央と両小口部近くには部分的ではあるが、色調の異なる浅い掘り込み部が存在していた。しかしこれが、組合せ木棺等の痕跡を示すものかどうかは判断し難い。

副葬品（第５図１・２）

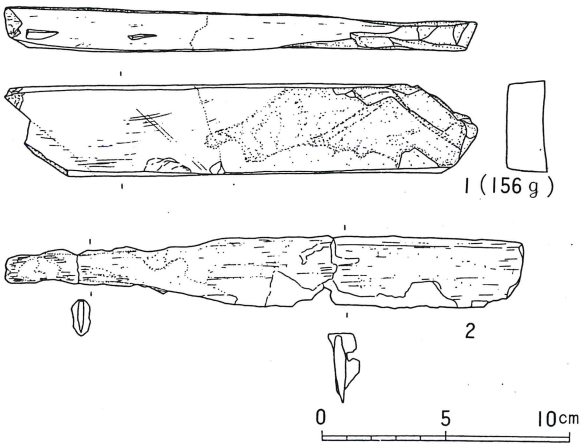
本土壙墓の頭蓋骨の北傍の小口部には、木質部の残る短刀と砥石が並列して副葬されていた。短刀(2)は全長20.8cm、幅2.8cm、厚さは刀身中央部で約0.4cmを測る完形品である。レントゲン



第３図　牛ノ田遺跡の遺構配置図　0　2　3 m



第4図　牛ノ田遺跡の土壙墓実測図



第5図　土壙墓出土遺物実測図（1　砥石、2　短刀）

撮影の結果、刃部・棟部とも直線的であり、茎部の目釘穴は無い。木質部の遺存状態から鞘に納めた形で副葬されていた様子である。一方、砥石(1)は頁岩質の石材で、長さ約19cm、幅約3.5cm、厚さ約1.5cmの短冊形を呈する直方体である。裏面は節理面を残し、使用面は正面と両側辺に限られる。研磨削痕を顕著に残す仕上げ砥である。

2. 検出遺物

土器類

縄文土器（第6図1・2）

1は球形胴部の上半に磨消縄文を施文する深鉢形土器である。沈線は直線的であり縄文後期の後葉に比定し得る。2は「く」の字に屈折する頸部と球形胴部を持つ浅鉢であり、縄文晩期前葉を象徴する黒色磨研土器である。

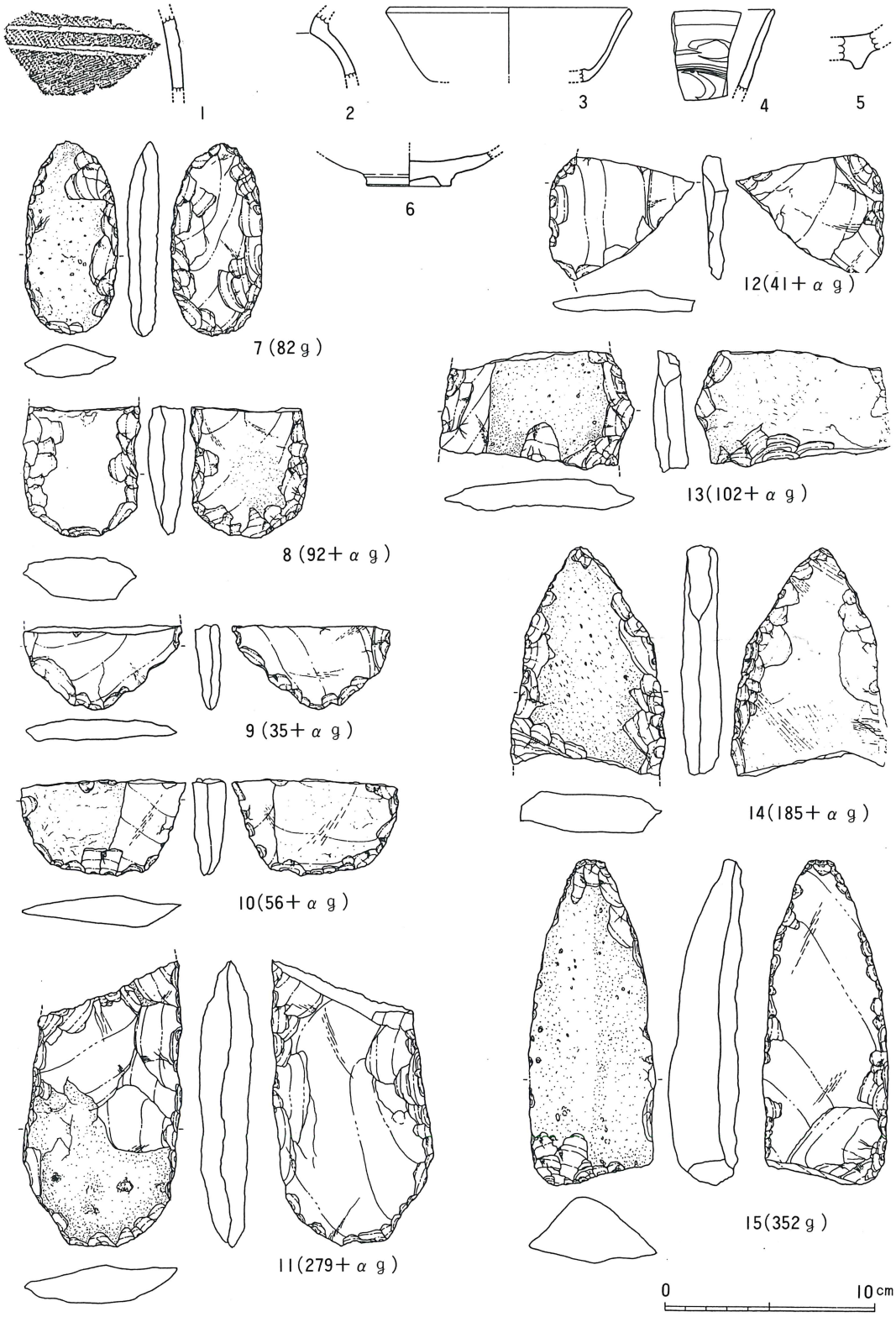
陶磁器（第6図3～6）

3は口径11.5cmを測る白磁の椀である。口唇部は施釉しない口禿を特徴とする。4・5は青磁片である。4は内面に草花文を描く中国龍泉窯の椀である。青白磁は全て中国産であり、4は12～13世紀、3・5は13～14世紀に比定し得る。一方、6は唐津焼である。底部は素地のままを特色とし、内面は重ね焼きを示す砂目積の痕跡を留める。表採品であり、17世紀の前半の所産である。

石器類

扁平打製石斧（第6図7～15）

縄文後期後半～晩期を代表する扁平打製石斧であり、1・2の土器に伴出する石器である。7はやや小型の完形品であり、表皮を残す下面には使用研磨痕を残している。8～11は基部を一部、あるいは大きく欠損し、12・13は基部、刃部共欠損している。また14は刃部のみ欠損している。15は扁平打製石斧の未製品である。これ等に共通する特徴は9・12を除いて片面に礫の自然面を大きく残す点と剝離痕が横長及び不定形状を呈することである。この普遍的な特徴は石斧製作の技法を示唆している。



第6図　牛ノ田遺跡出土遺物実測図

Ⅴ　寺縄手遺跡

寺縄手遺跡は牛ノ田遺跡の東約400ｍの地点であり、緒方川床との比高は約３ｍ弱程度である。発掘調査面積は約300ｍ²である。対象区は北から南の河川敷へ向って約10～20度の傾斜面である。検出遺構としては溝状遺構、大型不定形土坑、石組土坑等であり、出土遺物は少量の縄文土器、石器片と９世紀前後の土師器、須恵器片等が出土している。

１　検出遺構

溝状遺構（第７図・８図）

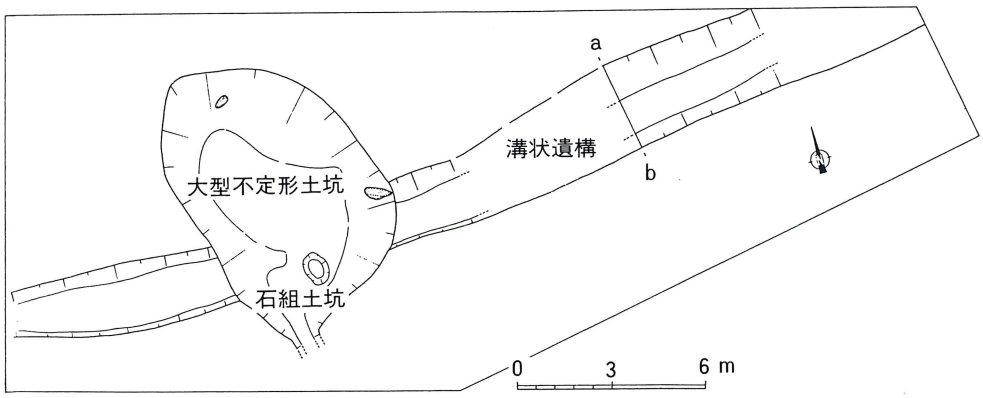
調査区の東から西へかけて、長さ約30ｍ程度検出している。検出平面の幅約３ｍ、深さ約1.5ｍで断面形は「Ｕ」字状を呈する大きな溝である。溝内の覆土は両側からの流れ込みの状態を呈し、レンズ状に堆積している。溝の覆土内には遺物の包含はなく時期の断定はできないが、後述する石組土坑との切り合いから平安時代よりは古く位置付け得る。

大型不定形土坑（第７図）

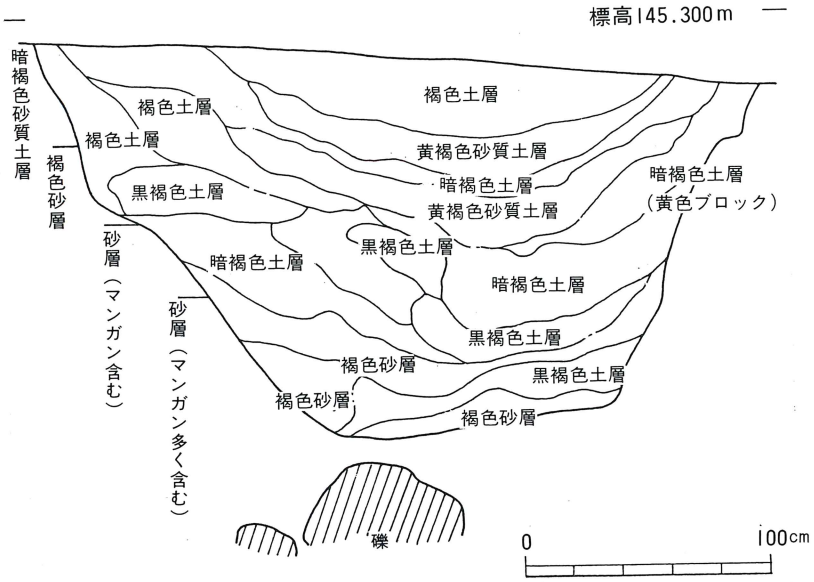
調査区中央で溝状遺構を切って大型不定形土坑が検出されている。長径約９ｍ、短径約６ｍ、深さ約1.6ｍを測り、擂鉢状を呈する。覆土は流れ込みの様相を示し、底部には砂層が堆積し、水の流入による砂の埋まったピットが多数存在している。南側には水が流出する溝が存在する。自然的要因か人為的な所産か判断はできない。出土遺物としては９～10世紀の土師器類が散見できる。

石組土坑（第９図）

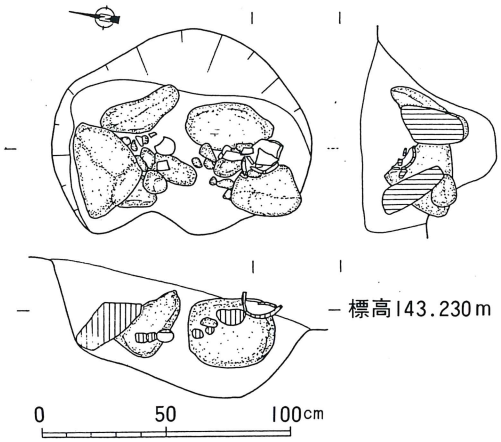
大型不定形土坑の底部で石組土坑を検出している。石組土坑は長軸を南北にとり、長径約100㎝、短径約80㎝、深さ約45㎝を測る楕円状を呈する。土坑内は人頭大の河原礫を４～５個楕円状に組み、中には砂、軽石等が流入していた。出土遺物としては土師器の坏や須恵器片等である。出土遺物より９～10世紀頃の所産となろう。



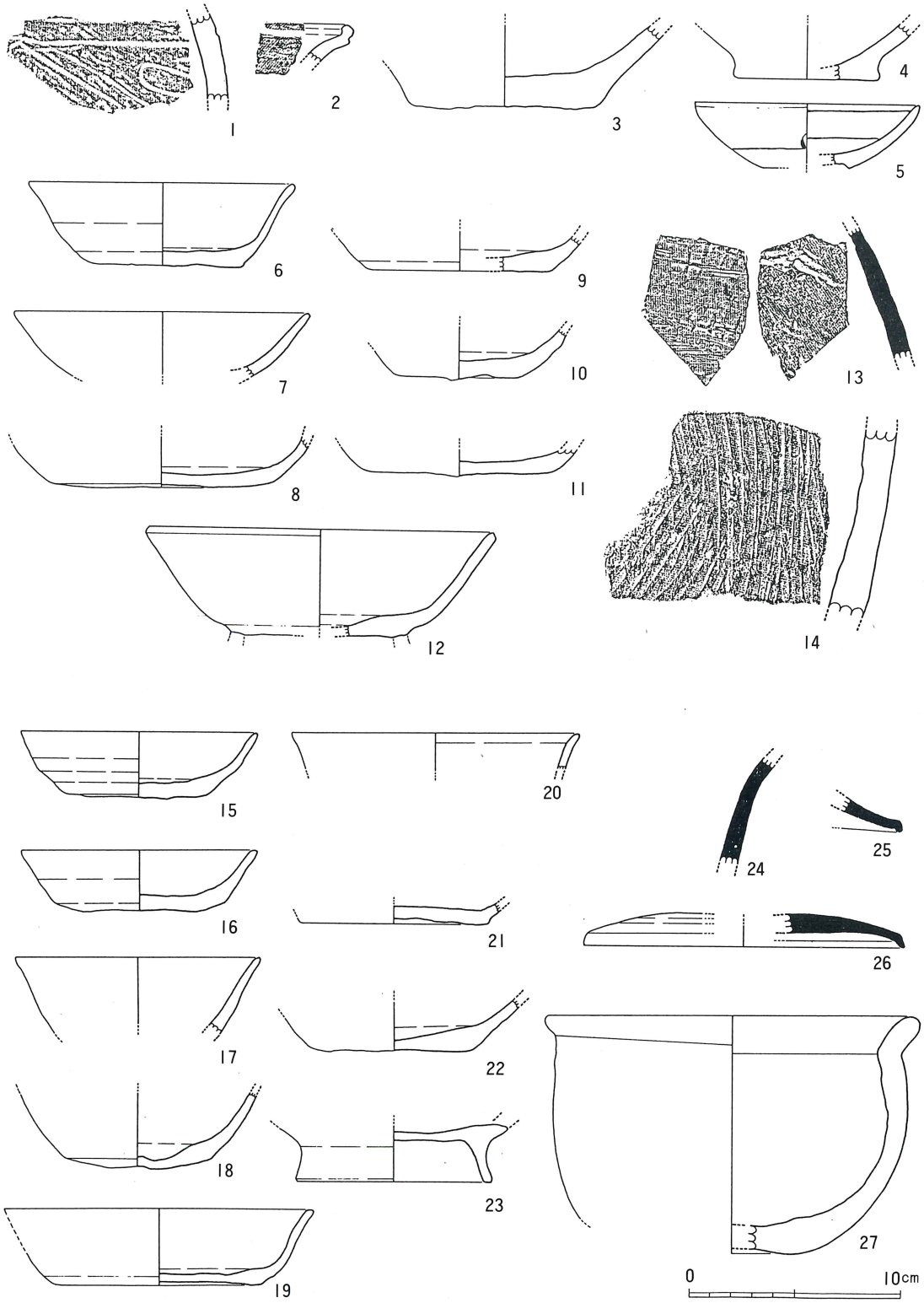
第７図　寺縄手遺跡の遺構配置図



第8図　寺縄手遺跡の溝状遺構断面実測図



第9図　寺縄手遺跡の石組土坑実測図



第10図　寺縄手遺跡出土遺物実測図

2　検出遺物

土器類

寺縄手遺跡で出土した遺物は表面採集で得たものと大型不定形土坑内、石組土坑内より出土したものに限られる。

a　表面採集遺物

縄文土器（第10図１～４）

１～４は表採遺物である。１は縄文後期後半の磨消縄文土器の胴部片である。２は晩期黒色磨研土器の浅鉢口縁部片である。３・４は縄文後・晩期の深鉢底部である。

陶磁器（第10図５）

５は染付の皿である。内外に２条の界線をめぐらし、底部碁笥底を呈する。16世紀に比定し得る。

b　大型不定形土坑出土遺物

土師器（第10図６～12）

６～14は大型不定形土坑内で検出されたものである。６～12は土師器の坏である。底部はヘラ切り離しのままであり、底部中央部はやや分厚く波打つ。坏の体部は直接的に斜めに開くが口縁部付近でやや外反するもの(6)と直線的に延びるもの(7)が存在している。12は高台付きの椀である。

須恵器（第10図13）

13は格子目タタキの須恵器であり、内面にナデ消された青海波文を持つ。

その他の土器（第10図14）

14はヘラ痕を残す土器である。

c. 石組土坑出土遺物

土師器（第10図15～23）

15～23は土師器の坏である。底部はヘラ切り離しのままの状態であり、凹凸を持つ。坏底部から斜めに延びた口縁部はゆるく外反する状態を呈する。23は高台付きの椀である。割れ口は摩耗痕が顕著である。

須恵器（第10図24～26）

24～26は須恵器片である。24は表裏に自然釉がある。25は坏の脚部片であり、26は坏蓋である。中央に撮みを持つと考えられる特徴的な一群であり、時期決定のメルクマールとなり得る。

その他の土器（第10図27）

27は厚い器壁を持つ鉢であり底部は若干揚げ底状を呈する。暗赤褐色を呈し、粗雑な作りである。口径17.6cm、器高約11cm。

以上、寺縄手遺跡の大型不定形土坑や石組土坑等より出土した遺物は若干古い須恵器も混入しているが、総じて土師器の坏には口縁部の形態や底部の整形等に特徴的な共通点がある。遺物が僅少なため時期区分は困難であるが土師器の特徴から約９～10世紀頃とみられる。

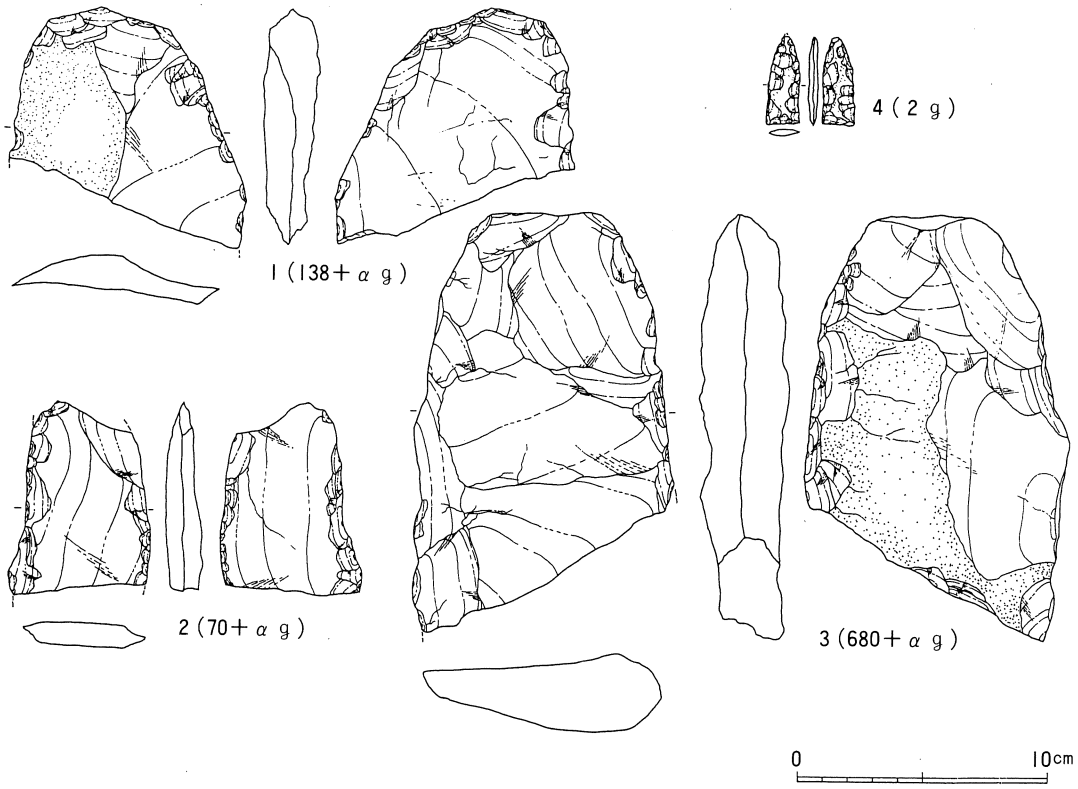
石器類

扁平打製石斧（第11図１～３）

石器類は大型不定形土坑中より発見されている。１～３は10図１～４に伴出する安山岩質の扁平打製石斧である。１は中央部から刃部を欠き、２は基部と刃部を欠損する。３は大形の扁平打製石斧であり刃部を欠損する。いずれも横長の剝片を素材とし、片面に自然礫面の一部を残す。

石鏃（第11図４）

４は安山岩質の打製石鏃である。中央部に研磨痕を残す。



第11図　寺縄手遺跡出土遺物実測図

Ⅵ　大坪遺跡

本遺跡は寺縄手遺跡の東約200ｍの地点である。調査区は路線敷に沿って約250ｍ²の範囲である。表土下約60～70cmで暗黒色の遺物包含層に達するが、遺構等は皆無である。出土遺物としては縄文時代の土器と石器類である。

1　検出遺物

土器類

縄文土器（第13図１～３）

１～３は縄文土器片である。１は「く」の字に折れる口縁部に３本沈線を施し、沈線間を磨消縄文で埋める後期後半の深鉢形土器である。２は晩期の粗製深鉢である。口縁部に３本の沈線を施し、口径約35cmを測る。３は刻目突帯文土器の口縁部である。表裏に浅い条痕文を残し、口縁下の突帯の刻目は太い。

石器類

扁平打製石斧（第13図４～９、14図１・２）

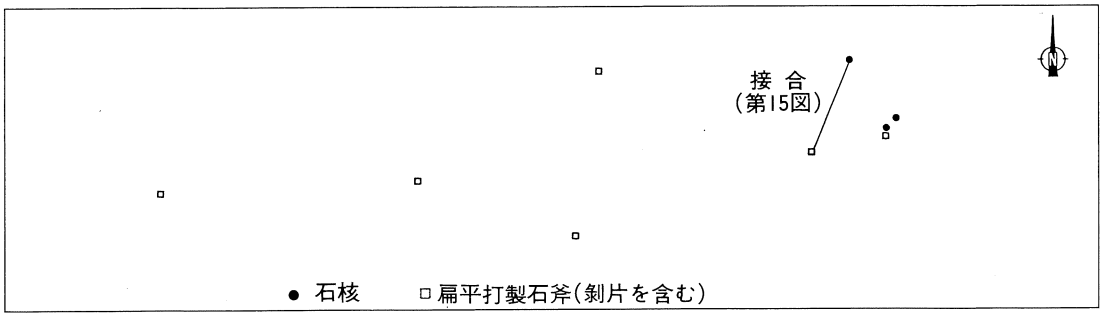
縄文後・晩期の土器に伴出する扁平打製石斧である。４・５はほぼ完形品であり、４の表面には摩耗痕が顕著に残る。６～９は基部を欠損し、14図１は基部、刃部とも欠く。14図１の他はすべて片面に自然礫の表皮を残す横長剥片を素材としている。第14図２は細かい基部と扇状に開く刃部を持つバチ型の石斧である。

石核（第14図３）

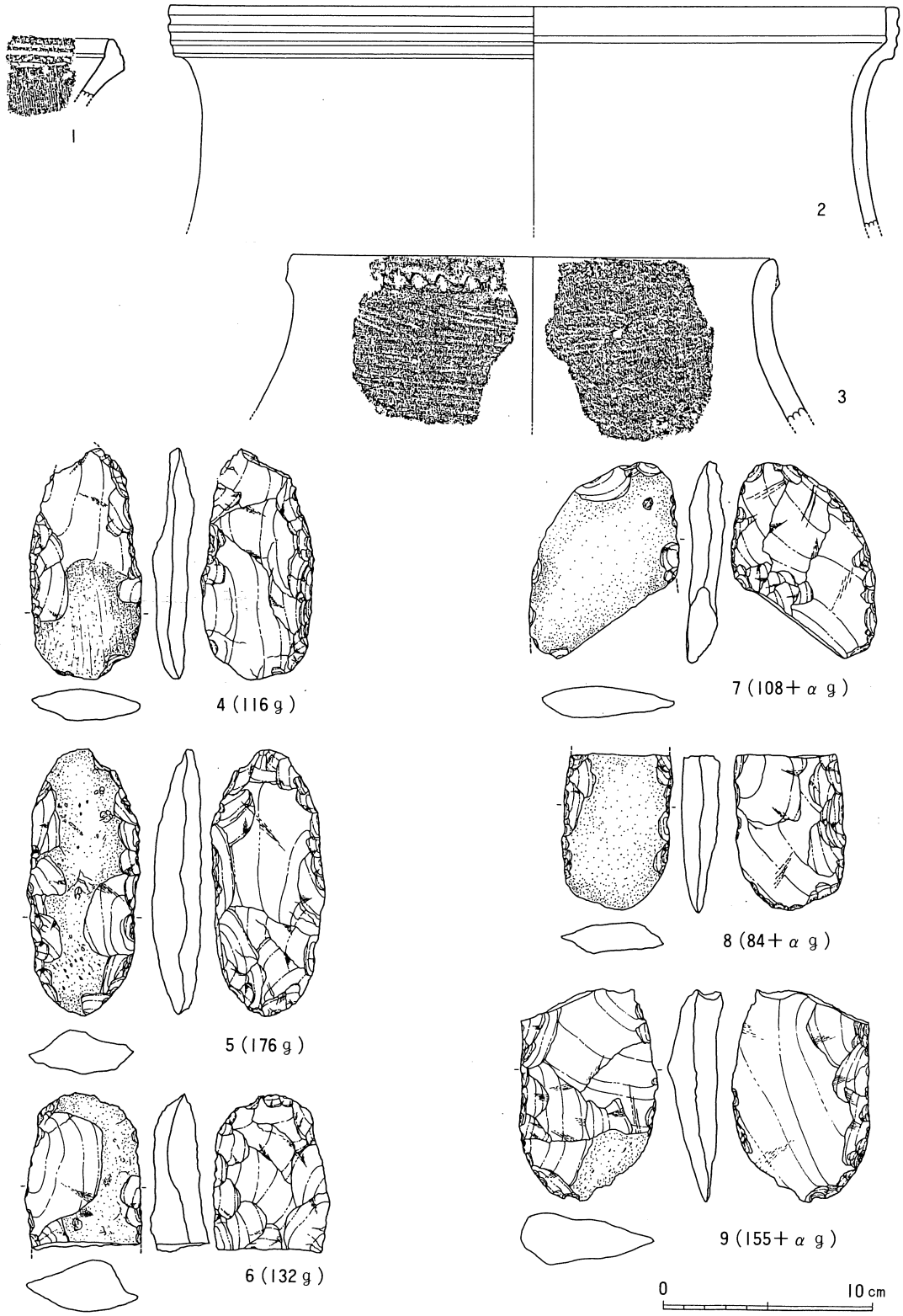
扁平打製石斧の石核と考えられる石器である。打面をチョッピングツール状に交互に入れ換え、自然面を持つ横長剥片を剥離した過程を示すものであろう。

礫器（第14図４）

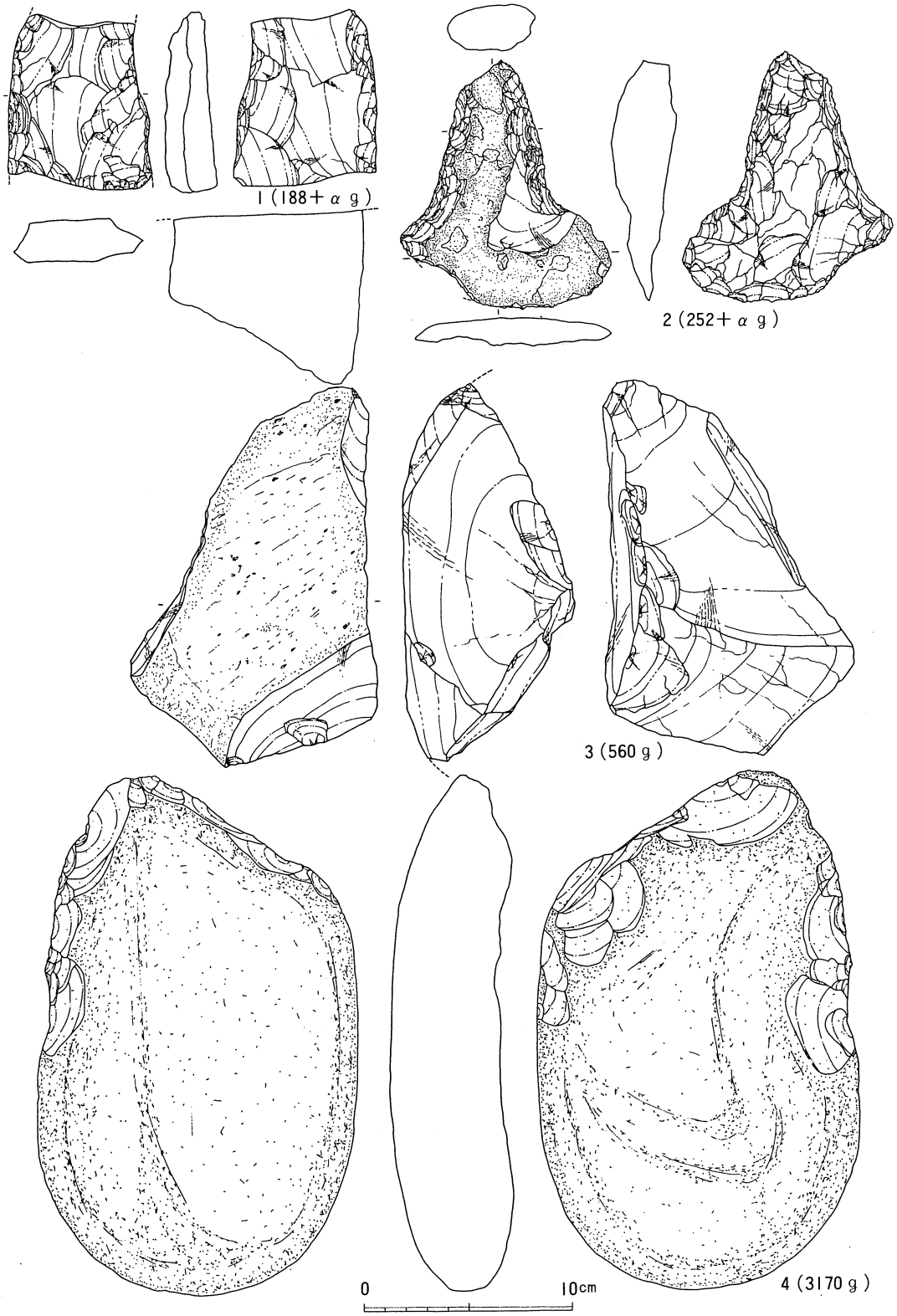
人頭大の河原礫に加工を施した両刃礫器であるが、扁平打製石斧を製作する石核素材ともみなし得る。



第12図　大坪遺跡出土遺物の分布図　0　3　6m



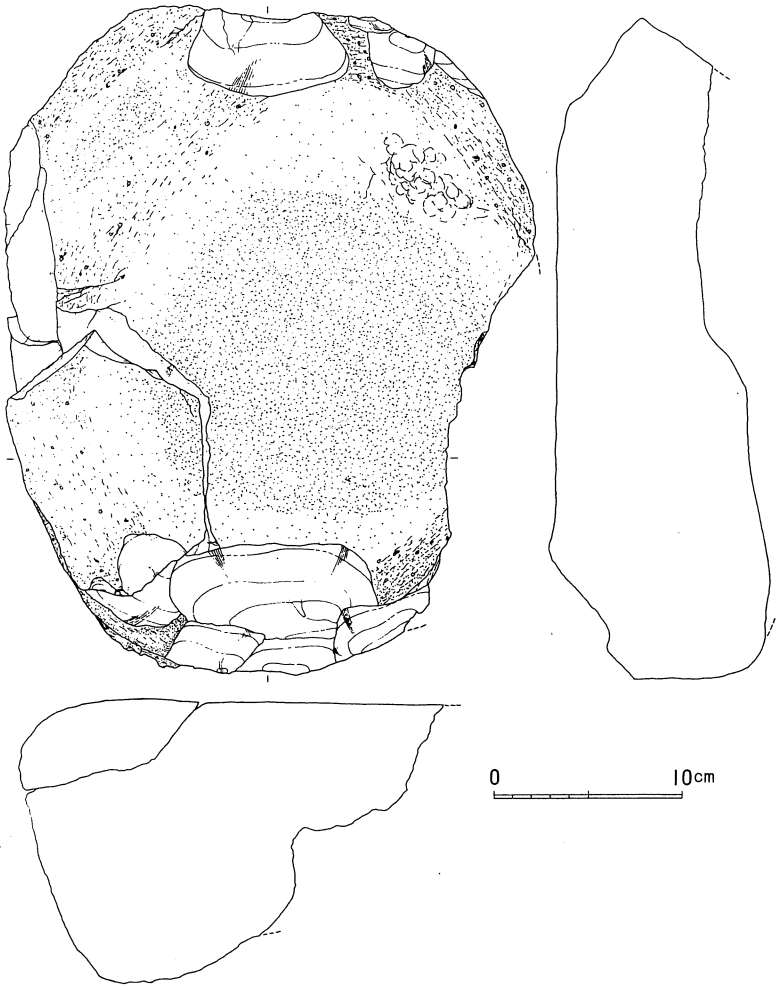
第13図　大坪遺跡出土遺物実測図



第14図　大坪遺跡出土遺物実測図

石皿及び石核（第15図）

人頭大の自然礫の表面が若干磨滅しており、石皿と考えられる。また、石皿の側面は加熱による赤化現象が顕著である。石質は扁平打製石斧の素材ともなりうるものであり、自然面を持つ横長剥片が数ヵ所で剥離している。一方これと接合関係のある剥片も検出されており（第12図）、扁平打製石斧の石核として二次使用されたとも考えられる。



第15図　大坪遺跡出土遺物実測図（剥片接合）

Ⅶ　まとめと考察

今年度の調査対象であった緒方町大字井上に所在する牛ノ田遺跡、寺縄手遺跡、大坪遺跡の検出遺構と遺物類を瞥見したが、いずれも情報量は僅少であり注目し得る遺跡とはいい難い。もちろん、調査対象域が緒方川の左岸の路線計画内の小範囲に限定しての結果であるため、遺跡の主要部は北方へ展開する可能性は十分あり得る訳である。ここでは調査成果をもとに次に掲げる若干の問題点を提示しまとめとする。

1. 牛ノ田遺跡の土壙墓の年代と特徴

牛ノ田遺跡は多数の柱穴群と１基の土壙墓が検出されている。土壙墓内には短刀と砥石が頭部位に副葬されていたが、時期決定の鍵となる土器類の副葬がなく、柱穴群との関係も、にわかに決め難い。調査時に出土した遺物は縄文時代の土器２点、石器９点、中世輸入磁器３点、表採資料の近世陶器１点である。　柱穴群と土壙墓の掘込み面や覆土の色調等の検出状態を比較し、出土遺物で位置付けると、両者とも12～13世紀の時期に相当させるのが穏当である。柱穴群に伴出する遺物が僅少であり、そのうえ、土師器等が皆無である様相は不可思議であり、遺構の性格を反映した現象であるとも推測できる。また一方、柱穴群の機能については保留するとしても、これと同一地点で単独に発見された土壙墓は集団墓という墓域を構成しないものであり、これを後述する類例資料の中でながめるとき、中世のある階層における屋敷と墓との関係を示す特徴的な例となり得る。

第16図は管見にふれた県内の中世土壙墓の類例資料である。これ等についての時期や特徴を列記してみる。

今回の対象資料は緒方町牛ノ田遺跡をはじめ、野津町の八里合遺跡[注1]、朝地町の田村谷遺跡[注2]、宇佐市の上ノ原遺跡[注3]、城遺跡[注4]、武領遺跡[注5]、中津の黒水遺跡[注6]、草場窯跡遺跡[注7]、上万田遺跡[注8]、玖珠町の中西遺跡[注9]、日田市の小迫原Ａ区遺跡等[注10]、墓壙と推察できる県内11遺跡例である。これ等を墓域の選地や規模及び方位、副葬品等について総合的に把握し、共通点や個別の留意すべき特色を抽出すると次のように整理できる。

①　土壙墓の周辺調査がなされていない野津町の八里合遺跡、草場窯跡遺跡や宇佐市の武領遺跡等を除く８遺跡は全て柱穴群や他の生活遺構の中に単独に近い形で検出される例が多く、群集墓としての墓域形成はない。

②　土壙墓は内法長径約100～162cm、短径50～95cm、深さ約16～46cm内に含まれ、略隅丸長方形状を呈す。検出面の深度で増減する深さを除く平均値は内法長径約126cm、短径約64cmであり、その比は短径１に対して長径２となり寸づまりの長方形を成す。この数値は弥生・古墳時代における既存の土壙墓とは異質[注11]である。

遺　跡　名	土壙墓の検出地点	規　模 長軸　短軸　深さ	長軸 方位	土器類				
				坏	小皿	瓦器椀	青磁椀	白磁椀
緒方町　牛ノ田遺跡	集落内	外法143×68×38 内法130×68×38	南北					
野津町　八里合遺跡	?	?	南北?	1	4			
中津市　黒水遺跡	集落内	150×95×30	南北		4	2		
〃　草場窯跡遺跡	?	135×50×	南北				1	
〃　上万田遺跡	集落内(?)	?	?			3		1
宇佐市　武領遺跡10号土壙	集落・墓地内	外法160×110×46 内法132×73×46	東西		5			1
〃　上ノ原遺跡	集落内	外法150×74×20 内法100×50×20	南北			1		
〃　城遺跡	集落内	外法132×70×20 内法125×65×20	南北		3	1	0.5	0.5
朝地町　田村谷遺跡	集落内	103×77×20	南北					
日田市　小迫原A区遺跡	集落内	100×50×	南北		2(?)			
玖珠町　中西遺跡	集落内(?)	外法173×71×16 内法162×51×16	南北					

③　土壙墓は不明である八里合、上万田をはじめ、東西にとる武領遺跡を除き、8～9遺跡が長軸を略南北方位にとる。

④　牛ノ田遺跡では成人と推量される頭蓋片や歯の残片が土壙の北側小口部で検出され、頭を北枕とした葬法が認識し得た。

⑤　土壙内の副葬品に青・白滋、瓦器、土師器の椀、坏、小皿等のいずれかを持つのは11遺跡中8遺跡である。中でも土師器の小皿5遺跡、瓦器椀4遺跡等が多い。青磁椀は1、白磁椀は2遺跡のみであり、他は破片である。

⑥　鉄器の副葬は和鏡を伴出した城遺跡を除く全てに認められた。鉄器は短刀、小刀、刀子等の切れ物が中心である。中でも短刀が5～7遺跡より出土し最も多い。

⑦　副葬品の中で注目されるのは砥石の存在である。長方形を呈し、幅が狭く厚さの薄い手持ちの仕上げ砥であり、11遺跡中4遺跡より検出されている。約36％の出土率である。

⑧　土壙墓の内の副葬品は北側小口部に集中して検出される傾向がある。

⑨　牛ノ田遺跡では土壙の中央部と両小口部に色調の異なる掘込み部分が存在し、組合せ木棺等が推量できる。

⑩　鉄器の副葬と考え難いのは鉄釘の検出である。これは木棺のものとみられる。11遺跡中4遺跡より出土する。

⑪　土壙墓の副葬品から推察して時期は12～13世紀に比定し得るものが7遺跡である。

以上の様に県出土の土壙墓11基についての共通要素や特色を抽出してみた。これ等から、中

副葬品										付属施設	遺物集中方位	人骨頭位	時期（報告書・教示者）
鉄器類						その他							
剣	小刀	短刀	刀子	不明鉄器	釘	砥石	銅銭	和鏡	滑石製品				
		1				1				土壙中央と両小口に掘込み	北	北	
		1	1	1	2	1					北		弘安8年(1285)
	1				1						北		12～13世紀(？)
		鉄器一括								方形周溝	北・東壁		12世紀末頃
		1					1				？		12～13世紀(？)
		鉄器一括			3～5						北・東		12～13世紀
		1				1					北		13世紀前半
								1			北		13世紀
			1						1		北・西壁		
		1(？)									？		中世
1	2			1	1	2					北		

第16図　大分県内の中世土壙一覧

世の墓制の一端をある位相の中でとらえると次のような埋葬状態が考えられる。

A. ①からこの様な土壙墓は集団墓や墓域形成が認められず、集落（屋敷内の一部）に単独に近い形で埋葬されたと考えられる。

B. ②、⑨、⑩から考えて単なる土葬ではなく、木棺直葬か組合せ木棺等の施設が考えられ、葬法には、何らかの屈葬形態がとられている。[注12]

C. ⑤、⑥、⑦から副葬品は日常の雑器＋短刀＋砥石という組合せである。特に短刀及び刀子という刃物の副葬は例外なく行われる。換言すれば、砥石を持つ土壙には必ず刃物が遺存している。

D. 土壙墓は③、④、⑧より判断して頭部を北方位に取り、副葬品も頭部を意識した北小口部に備えられる。

E. ⑪からこの葬法は13世紀を中心としたある階層に普遍的な送葬儀礼といえる。

以上が牛ノ田遺跡を中心とした県内11遺跡の中世土壙墓についての分析である。墓制という保守的で伝統性に富む儀礼は、地域性や階層差や宗教上の他界観念の相違で複雑に変化し、バラエティに富むものである。資料不足や文献からみた時代背景の不備等は否めないが、今後類例資料の増加を待って追考する必要があろう。

2　寺縄手遺跡出土土師器の位置付け

寺縄手遺跡の大型不定形土坑や同遺構内に遺存する石組土坑内より出土した土師器類は、基本的な形態や製作法に変化はなく、同一時期の所産とみなし得るものであった。

出土した土師器は全て破片であり、図上復元のできる考古学的完形品は僅か５例である。図示し得る全てでも16例を数えるにすぎない。従って、口径や器高比等の比較検討も無理であり、全般的な特徴から推量するしかない。

対象資料は14点の坏と２点の高台付椀である。これ等を総体としてみた場合、坏の製作上の特徴として底部は全てヘラ切り離しである。底部は粗雑に波打ち、ナデ調整も施されていない。形態上の特徴としては坏の底部から口縁部へと斜め上方に直線的に延びるものと、底部から体部へかけて内湾ぎみに移向し、口縁部付近で外反する一群とに細分できる。また、高台付の椀も底部はヘラ切りであり、基本的な相違はない。坏、椀とも体部内外面は回転利用の横ナデ調整である。

一方、この様な土師器に伴出（混出）して４点の須恵器が出土している。須恵器は灰釉が表裏に認められるものや須恵器の蓋である。蓋は厚い体部からそのまま身受け部へと細く尖る特徴を有している。また、外反口径は17.6cmを測り、ゆるい揚げ底を持つ器高約11cmの鉢型土器が検出されている。器壁は平均１cm程もある粗雑な作りである。以上の出土遺物がすべて一括資料としてあつかえないのは当然である。なぜならば、比較的新しい様相を持つ高台付の椀は顕著な磨滅を残す二次堆積資料であり、須恵器等にも古い様相は否めないからである。しかし、坏の底部に回転糸切り手法が皆無であり、小皿の出現も認められない現象を消極的なメルクマールとみなすと、寺縄手遺跡の土師器の位置付けも比較的容易になる。

坏の底部に回転糸切り手法が出現するのは大宰府周辺地域では12世紀初頭[注13]と推察されており、北九州地方では10世紀代[注14]に認められる。また宇佐宮弥勒寺ではＳＫ３遺構[注15]に坏、小皿ともヘラ切りと糸切り手法が共伴しており、これを11世紀代に比定している。

一方、小皿の出現については大宰府周辺では11世紀に坏からの分化が考えられており[注16]、宇佐宮弥勒寺でも上述したＳＫ３遺構からの出土がある。一方、豊後国分寺では薬師堂西地区瓦溜[注17]でヘラ切りのみの小皿が出土しており、その年代を国分寺の建立Ⅱ期、約10世紀代に当てている。

このように、寺縄手遺跡では検出し得なかった糸切り手法や小皿等の出現や導入は地域によって約１世紀前後のひらきがあり、緒方町地方において、これ等をにわかに位置付け断定することは早計であろう。しかし、同地域に良好な比較検討資料を見出し得ないいま、坏の形態や製作技術、糸切り技法や小皿の有無を考慮し、これと共通性のある遺物出土遺跡を取り上げれば宇佐宮弥勒寺ＳＫ２遺構出土資料[注18]が近いと推察されるのである。従って寺縄手資料は概ね９世紀を中心とする時期の所産と考えておくのが妥当であろう。

3　牛ノ田遺跡、寺縄手遺跡と緒方条里の上限

今回の調査で牛ノ田遺跡の出土遺物や遺構が13世紀の所産であり、寺縄手遺跡が９世紀頃に比定し得るとすると、緒方条里の上限もおのずから推測し得る。すなわち、牛ノ田遺跡や寺縄

手遺跡では表土下約50cmの間に旧水田面と考えられるマンガン沈着層が２～３面存在しているのである。これが、北側に展開する１町四方（約１辺109m）を呈する方形区画の条里制遺構の延長線上で把握することが可能であると仮定すれば、旧水田面は牛ノ田遺跡の時期判定から、その上限を13世紀以降と考えるほかないのである。しかし、当調査区には条里制遺構の残存すらなく、緒方川の氾濫による水田面区画の変更等も考慮されるのであり、条里の上限に関する積極的なアプローチはなし得なかった。

4　扁平打製石斧と石核について

今回の調査対象となった牛ノ田遺跡、寺縄手遺跡、大坪遺跡に共通した出土遺物は縄文後期後半の磨消縄文土器片、縄文晩期の黒色磨研土器等とこれ等に伴出する扁平打製石斧であった。各遺跡とも出土土器は２～３点であり、扁平打製石斧は牛ノ田遺跡で９本、寺縄手遺跡で３本、大坪遺跡で８本であった。これ等は復元可能な５例（25％）を除く他の15例（75％）はいずれも破損品である。この内刃部を欠くものが５例、基部を欠くものが６例、両方共欠損するものが４例である。

形態は基部が細く刃部が扇状に開くバチ形１例を除いては、すべていわゆる短冊形を基本形態とする長楕円状であり、横断面は紡錘形を呈する。長さは判断し得ないが、幅は平均６～７cm、厚さは約２cm弱である。

さて扁平打製石斧の素材はその80％が片面に自然表皮を残す一群である。またその剝片剝離には共通点があり、不明瞭な１～２を除く、約90％は横長剝片を素材としている。このことは緒方川床の転礫である安山岩系の河原礫を石核として、表皮を含む状態で剝離したことを物語っている。第14図３は扁平打製石斧の石核である。剝離面を打点として表皮を取込む状態に打点を移動させて剝離した残核であろう。また第15図は本来の機能は石皿であろうが、周縁には打撃痕が残り、剝片を剝離した様相が顕著であった。この石皿より約２m離れて剝片が接合しており（第12図）、扁平打製石斧の石核へと転用されたものと推察された。また、この河原礫の側辺は加熱による赤化現象が著しい。これを加熱を利用した剝片剝離技術の一端として把握できるものか、単なる偶然の所産かは今後の類例資料の増加を待って結論を出したい。いずれにしても、扁平打製石斧の石核は県内では清川村の岩戸遺跡の表採例[注19]に次ぐものであり、発掘資料としては極めて稀有な発見例である。

縄文後・晩期に普遍的に出土する扁平打製石斧は遺跡に母岩や剝片類が存在しないのが特徴である。これは、原産地で加工して製品化し、集落へ持ち込まれた可能性[注20]が指摘し得るのであり、緒方川左岸上に点在する土器片の僅少な後・晩期遺跡はその性格において今後十分留意する必要があろう。

〔注〕

注１　賀川光夫「五輪塔地下遺構の調査報告」『重要文化財　五輪塔　保存修理工事報告書』野津町教育委員会　1981年

注２　村上久和『朝地田村遺跡』朝地町教育委員会　1986年

注３　宇佐市教育委員会の小倉正五氏の御教示による。

注４　小倉正五「城遺跡」『大分県内遺跡詳細分布調査概報１』　大分県教育委員会　1982年

注５　宇佐市教育委員会の小倉正五氏の御教示による。

注６　城戸誠「黒水遺跡」『中津市加来地区遺跡群』　大分県教育委員会　1986年

注７　小林昭彦編『伊藤田窯跡群Ⅲ』　大分県教育委員会　1985年

注８　大分県文化課の村上久和氏の御教示による。

注９　大分県文化課の宮内克己氏の御教示による。

注10　高橋徹、桑原幸則編『九州横断自動車道建設に伴う発掘調査概報―日田地区―』大分県教育委員会、日本道路公団　1986年

注11　例えば宇佐市樋尻道遺跡の土壙墓を無作為抽出で10基ずつを２度行ない、内法短軸と長軸の比を出すと１：3.9、１：4.6となる。また、玖珠町小竿遺跡では1:3.5、１:4.3という結果が得られた。時間を無視した方法であるが中世土壙１：２との明瞭な違いを示す傍証となろう。　小倉正五・佐藤良二郎編『駅館川流域遺跡群発掘調査報告書１』、小柳和宏編『小竿遺跡』

注12　隈昭志・野田拓治編「尾窪―熊本県下益城郡城南町尾窪中世墳墓群の調査―」熊本県文化財調査報告第12集　1973年　村田多津江編「吉母浜遺跡」下関市教育委員会　1985年等には詳細な分析結果がある。

注13　横田賢次郎、森田勉「大宰府出土の土師器に関する覚え書き」『九州歴史資料館研究論集２』　九州歴史資料館　1976年

注14　谷口俊治編「砥石山遺跡」『北九州市埋蔵文化財調査報告書第28集』　北九州市教育文化事業団　1984年

注15　甲斐忠彦・宮内克己編「宇佐宮弥勒寺」『宇佐宮弥勒寺旧境内発掘調査概報１』大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館　1984年

注16　横田賢次郎・森田勉「大宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集４』　1978年

注17　真野和夫編『豊後国分寺跡』大分市教育委員会　1977年

注18　宮内克己「宇佐宮弥勒寺出土の土師器」『古文化談叢第14集』　九州古文化研究会　1984年

注19　高橋信武「第三章第４節（二）生活用具」『大分県史先史篇』　1983年

注20　坂本嘉弘「東九州における縄文後・晩期遺跡の動態―大分県を中心として―」『賀川光夫先生還暦記念論集』　1982年

写　真　図　版

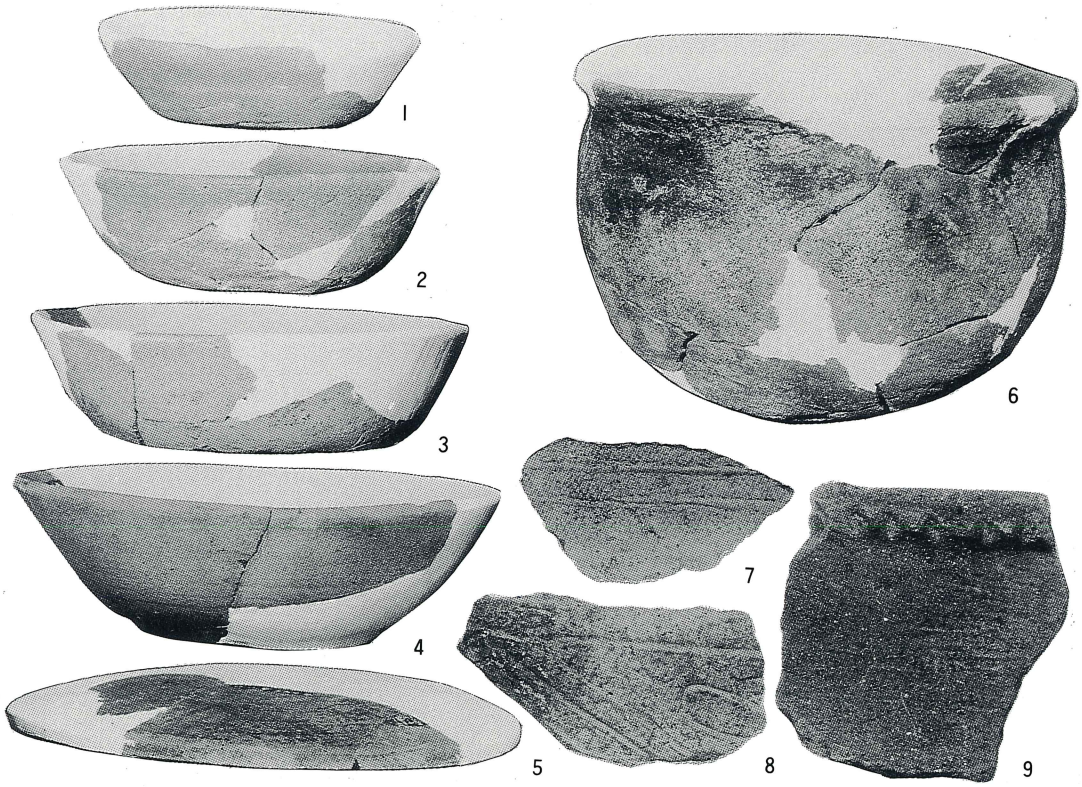
牛ノ田遺跡近景（西側より）

寺縄手遺跡近景（西側より）

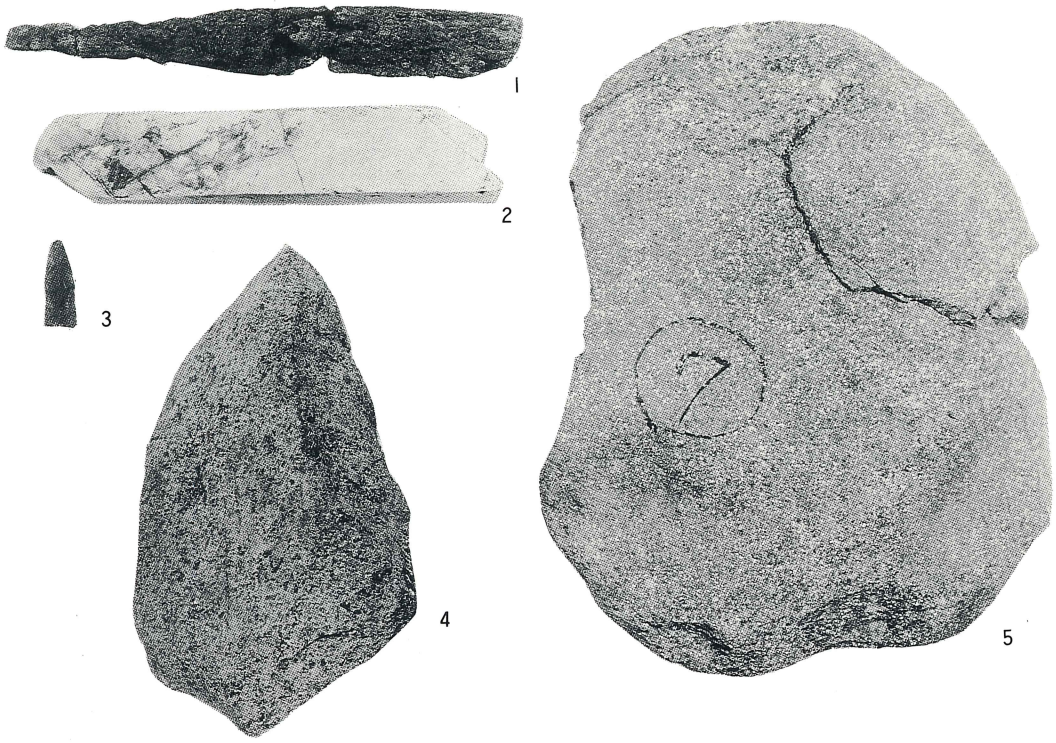
大坪遺跡近景（東側より）

牛ノ田遺跡の土壙墓（西側より）

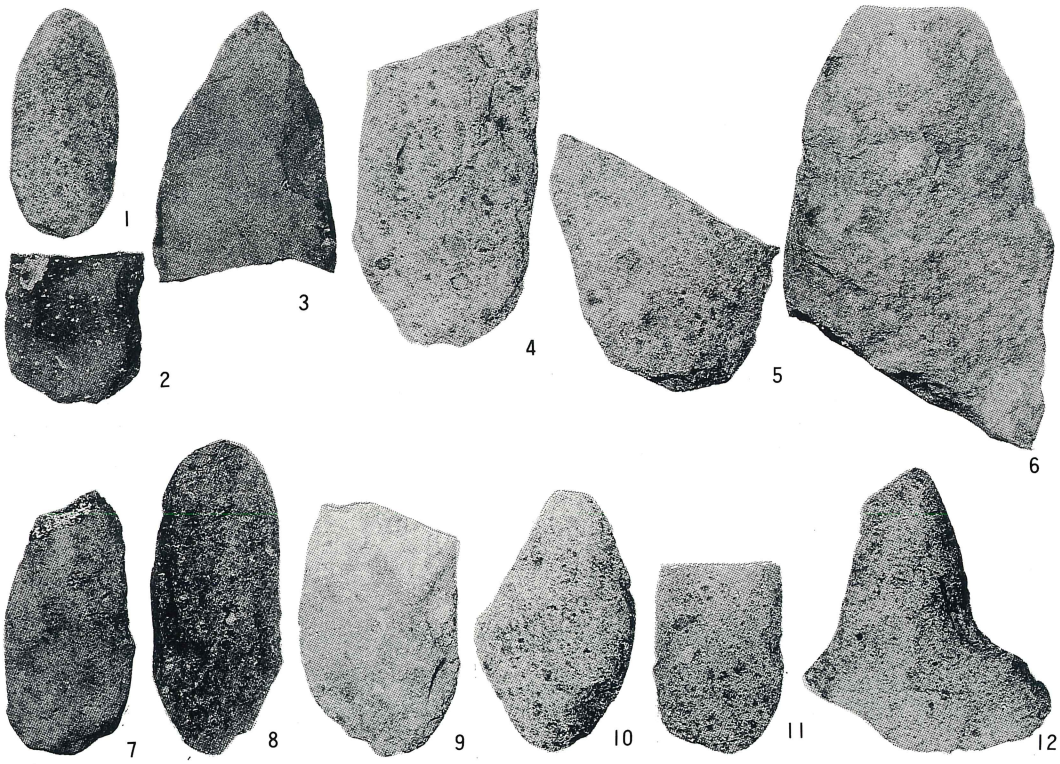
寺縄手遺跡の石組土坑出土状態



牛ノ田遺跡（7）寺縄手遺跡（1～6・8）大坪遺跡（9）



牛ノ田遺跡の中世土壙墓内（1・2）寺縄手遺跡（3）大坪遺跡（4・5）



牛ノ田遺跡（1～4）寺縄手遺跡（5・6）大坪遺跡（7～12）

緒方条里内遺跡
県道竹田・野津線改良工事に伴う発掘調査報告書
牛ノ田遺跡
寺縄手遺跡
大坪遺跡
昭和62年3月31日

発行　大分県教育委員会
印刷　東洋印刷有限会社